

第36回 松江城下での不思議な話

松江の怪談といえば、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の『知られざる日本の面影』、『怪談』に記された話がよく知られています。八雲は、奥さんのセツ婦人から不思議な話を聞かせてもらって執筆していましたが、今回は、松江市外で語り継がれた堀尾忠晴の時代の松江城下町で起きた不思議なお話を紹介いたします。次のようなお話が伝わっています。

堀尾家臣の間路九郎兵衛には妻がいなかったので長屋に住んでいました。九郎兵衛は後家になった妹を養っていましたが、その時に下女も雇っていました。九郎兵衛はその下女を妻に迎えました。妹が亡くなった後に妻に暇を与えましたが、程なくして暇を与えた妻も亡くなりました。ところが不思議なことに、亡くなった妻の幽霊が九郎兵衛の家に現れるようになりました。しかし、九郎兵衛は少しも怪しまず、「茶の給仕をせよ」などと妻の幽霊に命じています。これには九郎兵衛に雇われていた下人なども恐ろしいことと思い、余所でも話をしたため松江中に間路宅に幽霊が出るのが評判となったそうです。

ところで、九郎兵衛の心易い近所の友人の松山又由郎、掛下清助、他に一名が九郎兵衛の屋敷に訪れ夜話を行いました。九郎兵衛は囲炉裏で豆腐を切り寄せ手づからこれを焼いて客人に振る舞いました。その時、九郎兵衛のいた囲炉裏の間と奥の間を仕切る暖簾の間から九郎兵衛の亡くなった妻の姿が見えたのは噂通りのことで、その場にいた九郎兵衛の友人たちはいずれも驚いてしまいました。しかし、九郎兵衛はけろりとして「また出おったか」と白眼をつけるように言ったところ周囲の友人たちは「気味が悪い」と答えました。九郎兵衛は「なんぞ気味わるきことあるべし」と平気な風でした。しばらくして暖簾を覗いたところ幽霊から、「豆腐の焼いたものを食べさせてほしい」との声が聞こえ、清助がお盆に豆腐を載せて暖簾の内に入りましたが、幽霊の姿は見え、豆腐が食べられることもありませんでした。狐狸の化たものかは知りませんが、九郎兵衛が気にもしなかったのも、その後そのような話は出されなかったそうです。亡き父から聞いた話によると、間路九郎兵衛とは、野村又右衛門と野村以心の叔父にあたる人物だということです。

さて次に原文でこのお話をみてみましょう。

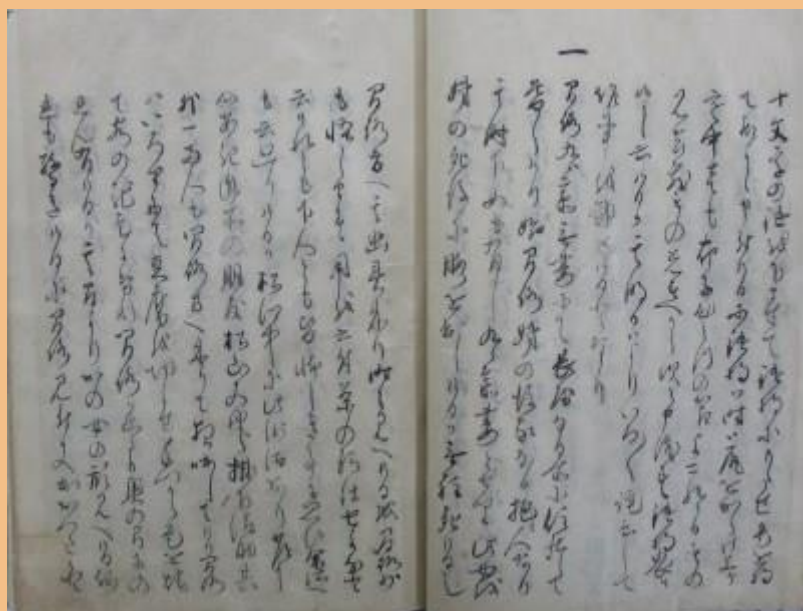
史料本文 『寧固齋談叢』巻8〔二十～二十一〕

一、間路九郎兵衛無妻にて長屋なる所に住居して暮しけり、始間路いもうと(女篇に弟)の後家なる抱り人あり、其時下女も有し九郎兵衛妻とせり此女をいもうと(女篇に弟)との死後に暇を出しけるか無程死ける也、間路方へ其幽霊来り時々見へけるを間路少も怪します用を云付、茶の給仕せよなど云けれとも下人とも皆怖しき事に思ひ余所へ

も云廻りけるか、松江中に此沙汰あり、常に心安き近所の朋友松山又由郎、掛下清助、其外一兩人も間路方へ来たりにて夜咄してけり、間路はいろりにて豆腐を切よせ手つから是を焼て客の馳走にせり、間路か居たる奥の間にのれん有けるか其間よりかの女の形見へける、何れも驚きけるに間路見付又出おつたと白眼

付けは入にける人々氣味悪き事と云ければ、間路は何の氣味悪き事の有へきと少もかまはぬ氣色也、暫して又のれんよりのそきけるをあれ間路殿と云ければ豆腐の焼たるを望に来るへし喰せてくれられよと云けるに清助豆腐を盆にのせてのれんの内へ入れ共、姿も見へず喰もせさりける、狐狸の化たるか知らね共、其主人事共せさりければ後は来らす成

にけり、先考の談、間路九郎兵衛、野村又右衛門、野村以心のの(ママ)叔父也



『寧固齋談叢(ねいこさいだんそう)』巻8(国立公文書館所蔵)

このたび紹介したお話では、間路九郎兵衛という登場人物が現れます。この本の他の説話では、間路九郎兵衛は大坂の陣で活躍し、250石から500石に加増を受けたとされています。しかし、同じ話で下人たちから情け無き事も多くあり、嫌われていたようです。

さて、ここで九郎兵衛は下女を妻に迎えたとしていますが、九郎兵衛は加増を受け500石をもらっており、士分の身分ですので、戦国期～近世にかけては正式な婚姻を結ぶのはかなり困難だったと思われます。

間路氏については、堀尾家の給帳で馬路氏の名前を数名見いだすことができます。そのため馬路氏の人物のどれかをモデルとしたお話かもしれません。また、間路九郎兵衛は後に500石加増を受けた話も伝わっているので代替わりをした可能性もあります。

堀尾時代の松江城下町の様子を伝える「堀尾期松江城下町絵図」では、馬路姓の家臣の屋敷が現在の北堀町や石橋町の千手院周辺にみることができます。

たとえば、北堀町には「馬路市太夫」(200石)の屋敷があり、千手院の脇道を通った城下町の外れに「馬路七助」、「馬路角兵衛」の屋敷地が見えます。

この他の登場人物についてしてみると、九郎兵衛の友人である松山氏の屋敷は「松山七右衛門」の屋敷が北堀町にあり、馬路市太夫の屋敷も北堀町内にありますので、この話の舞台は北堀町内かもしれませんね。



松山七右衛門の屋敷跡(北堀町)

ところで九郎兵衛の友人の掛下清助は、牧志摩の組に属する馬廻(100石)の家臣でした。清助の屋敷は不明ですが、堀尾忠晴は、寛永3年～4年にかけて家臣団や領内の僧侶に軍記物類・歴史書類の筆写をさせています。このうち清助は鰐淵寺や普門院の僧侶と共に軍記物の「源平盛衰記」を筆写しています。このため松江にも住んでいたことが分かります。清助も堀尾家改易後、石川家の家臣となっています。その後、清助の筆写した「源平盛衰記」は堀尾家から石川家を経て、現在は天理大学附属図書館の所蔵となっています。また、間路九郎兵衛の甥の野村以心は直政といい、忠晴没後50年にあたる天和三年(1683)に將軍徳川綱吉に対して堀尾家再興の願書を提出し、その忠心を賞されて幕臣に登用された人物で、石川家の家臣の女性を妻に迎えていたそうです。

このお話の原文が記されている『寧固齋談叢』という本は、堀尾家の女性が嫁いだ石川家の家中で書かれた本で、石川家・大久保家など徳川譜代に伝わる逸話の他に、堀尾吉晴・忠氏・忠晴三代家中の逸話も記した逸話集です。全12巻で巻6～8に堀尾一族と堀尾家臣団の話が記されています。成立年代は未詳ですが、徳川綱吉のことを法名の常憲院と記していることから、宝永6年(1709)以降に現在の形にまとめられたと考えられます。

堀尾家の改易後、堀尾家臣の多くが縁を頼って石川家の家臣なった人々も居りました。そのような縁者の人々の間に伝わっていた話のようです。現在は、国立公文書館、金沢市立玉川図書館、胎内市黒川地区公民館などに所蔵されています。このように、堀尾家の改易した後にも、石川家を介して堀尾時代の記憶が語り継がれていったことを示しています。

(平成26年8月21日 松江市史料編纂室 福井将介)